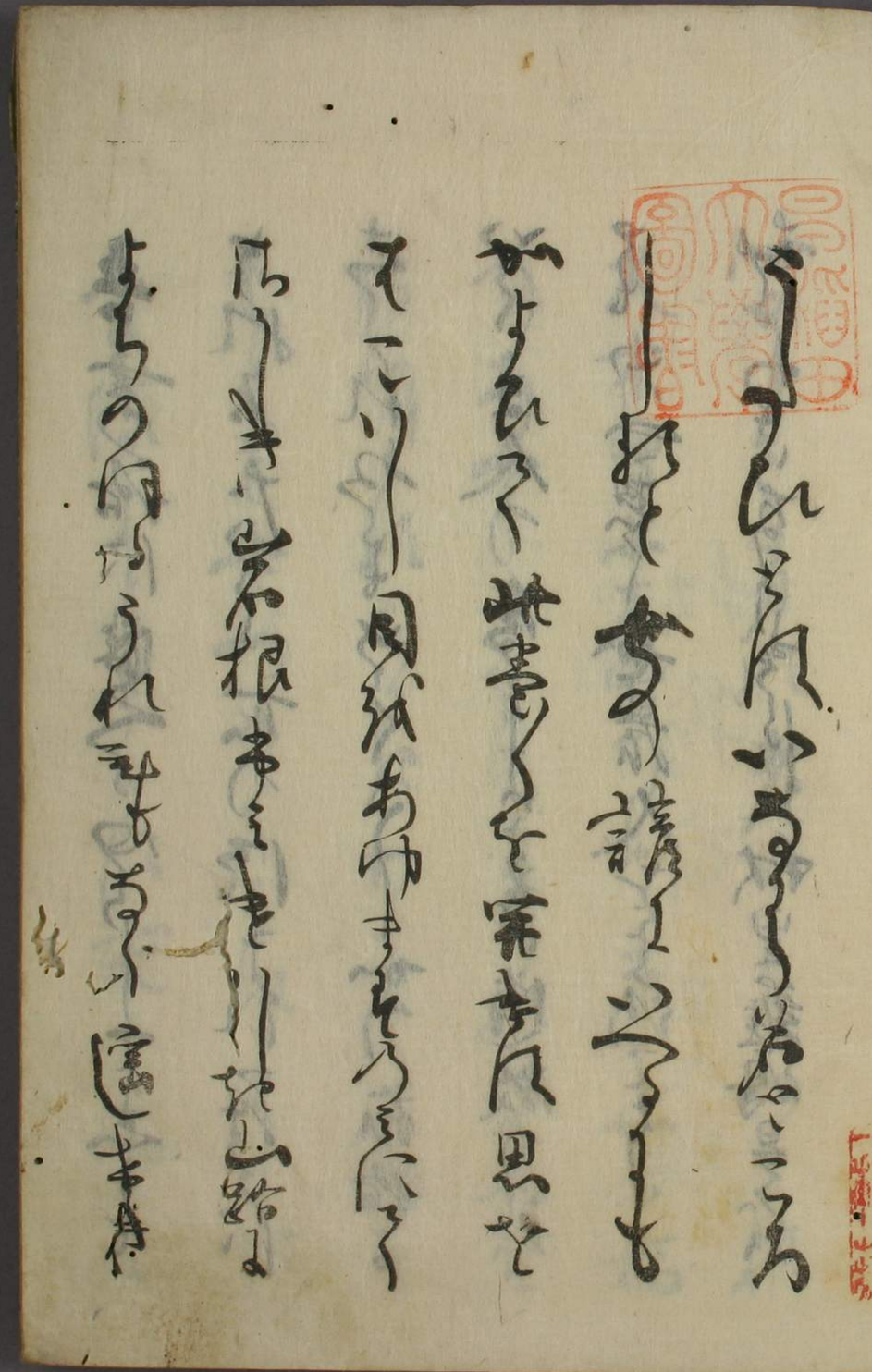
東曽路名所圖會

一乾

ル 3
3279
1

門 ル3
洛 3279
巻 1

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈



吾妻路に遊べる思ひして志らぬ
されおたる所の流れも野らに
志られぬ事もめくらしかの旅路よ
いく主人の為しいよゝ道教の外
までに懇く世農人をとゞめこたし
むつわきなりまし秋里籬島是に

心ほしき勇れ老をもわすれ
大木曽小木曽のおそろしかけ橋
のあやうきをこえそれぞれまよ
ひけられちるわすれの所く
まくそまつめくこれたしに
言流よりもちゝに求くやは

文化二乙丑三月

文章博士菅原尚長卿

松菊齋主人題

中ごろ[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]わしら[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

言の葉は地をかへて清きくもとの所なり

申さぬ事を誰かしるらん　辨

文化二年十二月

富士谷成元しるす

岐阻路名所圖會自序

岩道婦美のはになやむる多ひ人のもきもの

駒引神の身かけあらはれて弥をのこ乃かなはは

峰にして六十九(ムソヂコヽノツ)のむまやの道をはるかに木曽路乎

おそむくは道さへも續紀に大寶三年に路を圖

岐蘇路はむかしよりありとこれをたつねは多ふりの

日本武尊碓氷のけふりのあらはれに濃のゝ橋姫を

慕ひ給たまひ科濃に入る路をのみ文古事紀にかく

故しかも信濃より甲斐より科野にかゝるにや

[illegible]
又之多りこ代實録ハ　詔ありて左馬權ノ允
從六位上藤原正範朝臣みめりて[illegible]ひて木曽を
こ野國と定られしかも星霜を嶺かりて みち
[illegible]も改て中世[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
木曽と號せ[illegible]ふ　今を[illegible]ハ[illegible]
麓原山伏屋の里[illegible]
姨捨山も道[illegible]遠く樵[illegible]
[illegible]高貴[illegible]

おの[illegible]
こ[illegible]の里を名のこ桔梗ら原ら[illegible]く田畑をかり
諏方ハ湖氷の橋ハ[illegible]早振神ハ[illegible]
[illegible]
神[illegible]御射山の係屋の[illegible]
鹿の[illegible]
[illegible]田[illegible]
洗井澤の[illegible]
碓氷ハ[illegible]

[illegible]川ハ佐野ゝ舟橋のあるところ
岡部の里 熊谷乃寺 氷川濃ゑ 後の社 浦く
戸田川をわたる江戸のかたる也 [illegible]
所々くしく道ゆく人もまれなるゆゑ
所り上人ゆくゑかたひしゆゑ其名殺の
殘ル名も有 義仲あとの感已 ゆゑ
なるゝ今ハ治ル
御代ハあひくゝ道もゆくゝかけくもたいゝ
へきくゝ[illegible]ハ出るの時ハいとうるくゆく滿る

ゆきとひも多く海をわたる人をかし 山賊のみ
あるくしくゝ人のゝ話 高砂屋ハ剛毅木訥ゝ仁ハ
かゝゝ人馬のゝかゝほくく山川ゝかゝゝ 州木のゝさら
外國ハゝゝ[illegible]ゝ宇宙ハしくく日と月を收りむ
り人を[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
宿道七つの上ハ多ゝ中道の沼ハ日光 山
ハ[illegible]書 [illegible]海 [illegible]ハ[illegible]
名ゝ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
の[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

をゆ事しも多かりん名人のちゑぶ補ひ
給ふは余をうれしんとのそ

文化元きのへあの九月

秋里籬島

凡例

一 岐阻路名所圖會を所謂東山道なり今俗ふ中山道とも
いへり京師より起りて江戸に到る都て道程五百四十
武蔵等五箇國の道條なり来て往を古横街道とも六十
九駅道法百三拾五里餘なり名所古跡神社佛閣を圖
會しく駅毎に國をもつて記し行程も其下に英ん

一 京師より茅津の駅まで東海道名所圖會に出ぬまべ
きく小首畧して其漏たる所補ふ其より嶋毎に先編の例を
もつて記し街道の神社も延喜式神名帳に載ふを選ぐ
たる又大廈よりていたるまで所謂御嶽駒ヶ嶽ふく
渾く方位を示に丑寅の方位に循つく某の東何里某南北
何町ふあり也證し又神社佛閣の左右も其神新本

るの左右たり又道條左の方右に〻〻仕東師より東国ホ
赴く旅者の左右より

一 五巻六巻い江戸より東に到る香取鹿島流波山日光名の
名所をもるん彼蘇圖會附録ホ備ふ

一 日光山与貝原氏参詣記あり彼地より若ふ絵畫又与日光
名勝志の系板を抜萃〻又与兎の後坂も拾ふ脱漏あり仕
後人の補遺を俟而已

木曽路名所圖會巻之一

目録

内裏舞御覧御圖
粟田山　日岡嶺　洛三條橋　白川橋
追分　走井　御廟野　四宮河原
開清水　○大津　蟬丸社　開寺
唐崎松　矢橋渡口　水禮親吉　三井寺
勢田長橋　石山寺　膳所城　粟津原
草津　紀行　野路玉川　矢倉
○草津　大寶社　○守山　守山寺
樋観音　野洲川　布施　御上神社
三上山　篠原社　平宗盛墳　蛙不鳴池
鏡山　鏡宿　牛若丸投宿家　長者碓

十蓮坊墳　武佐寺　○武佐八幡

比牟禮社　本社　神樂殿　天照太神社　拜殿　稲荷祠　樓門　若宮　鳥居額　大鳥祠　末社

長命寺　水茎岡　蒲生野　老蘇杜

奥石神社　鷄鶏神社　淨嚴院　惣見寺　三層楼　圓通閣

安土山古城　日記　桑實寺　箕作山古城　小松寺

瓦屋寺　観音正寺　観音寺古城　地獄越

石馬禪寺　本堂　圖魔堂　方丈　役行者　四十九院　地藏堂　雲居松　多門天　石の馬

愛知川　○愛知川驛　○高宮　神樂殿　樓門　三宮　日出枚　鎮守八大竜王　駒繋松　柴石　馬墳

蔓菁細工店　犬上川　唯念寺　高宮鳥　細布店

多賀大社　本社　絵殿　末社　拝殿　蓑王堂　妻令石

不知哉川　鳥籠山　大堀八幡　磨針嶺　小町塚　彦根山

○鳥居本　米原道

千々松原　磯崎祠　筑摩祠　筑摩野

朝妻里　長濱　将軍八幡宮　本社　高良社　本地堂　地主神　宇賀神　祖堂

竹生嶋　本社　観音堂

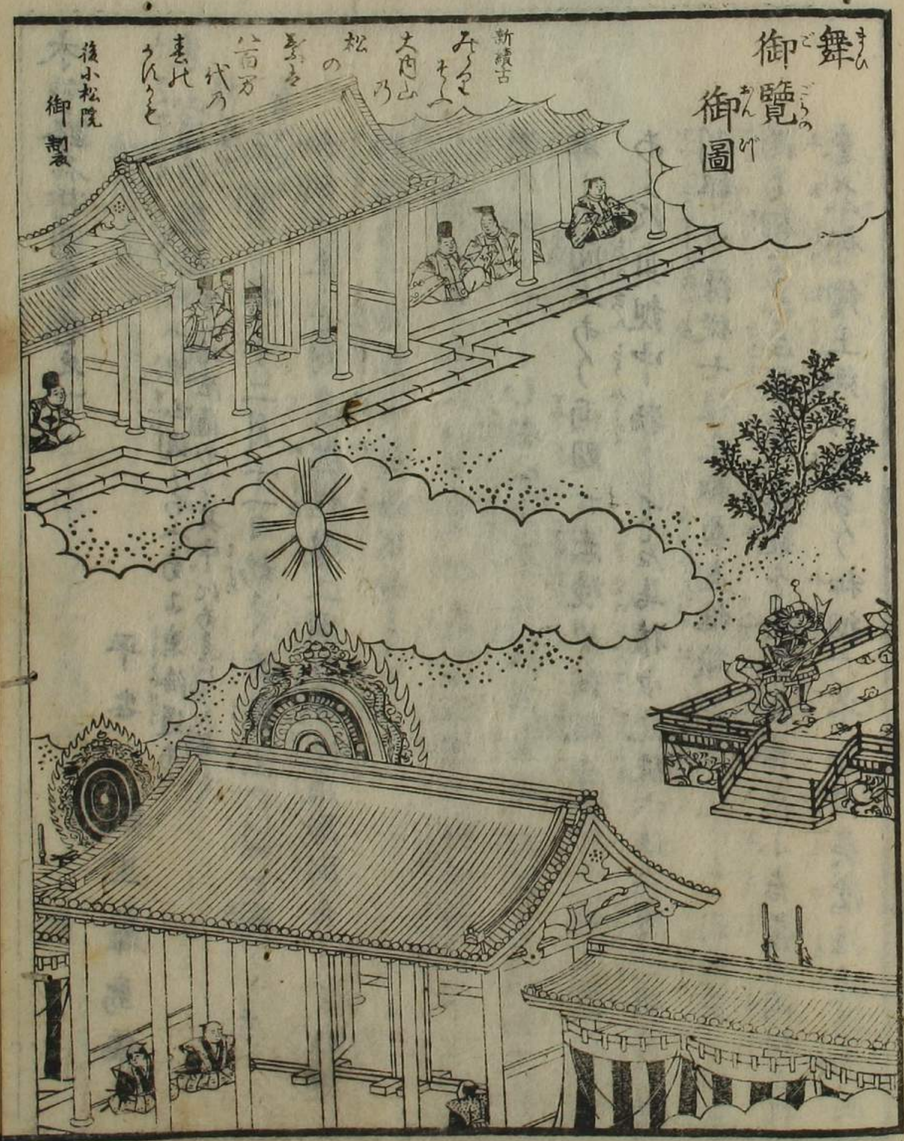
稲荷祠　護摩堂　薬師堂　妙覚院　地藏堂　什寶數品

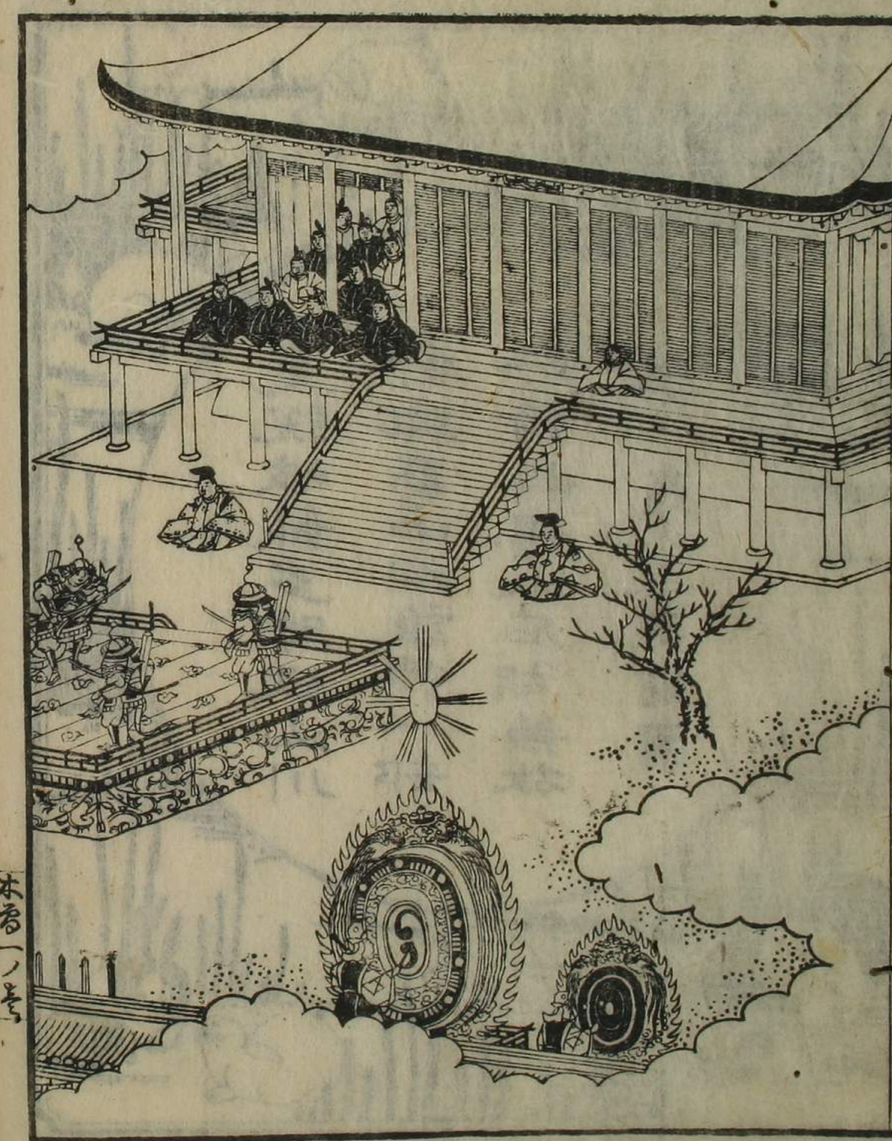
琵琶湖　余湖　○番馬　地藏堂

○柏原　蓮華寺　本堂　六波羅山　○醒井　四石　三水　長尾謙信塚

伊吹山　厳願梅　土肥墓　膳吹丈

見說岐蘇多勝縱山川
都與蜀中同誰將一部
好詩料得似石湖兼放
翁
愚山愼題


舞御覽御圖
新蔵古
みくるま
大内山
松の
葉を
百万
代の
春代
ちとせを
後小松院
御製


本書一ノ巻

木曾路名所圖會卷之一

平安　龜里蘿島編

東山道岐蘇路　俗ふ中山道とも南は東海道あり北陸道あり其中にあまねく号す

續日本紀云　大寶二年十二月十一日始めて吉蘇山の道を開く

元明帝紀云　和銅六年七月美濃信濃二國の界徑道險阻あるを以て往還難艱なり因茲吉蘇路を拓く

三代實錄云　元慶三年九月四日幸卯美濃信濃の國縣坂上岑を以て美濃國惠那郡を信濃國筑摩國の堺とせむ縣坂上岑は相幸なくいまだ変ずる不郡とも同じあり両國吉来境界は相幸なくいまだ変ずる不あるべし貞觀中勅して左馬權少允従六位上藤原朝臣正範刑部少録従七位上敦員直継雄等を遣して両國司と地を隙なく相定む正範等奮起を撿て云吉蘇小吉蘇の両村は惠奈郡繪上郷の地なり和銅六年七月美濃信濃の両國

の堺徑路險隘往還甚難をなげく吉蘇路を通ぜ七年国二月美濃守従四位下笠朝臣麿ふ封邑七十戸田六町を賜ふ少録正七位下門部連御主大目従八位上山口忌寸兄人各位階を進む吉蘇路を通ずるをなげくより今は地美濃信濃の地なれば何ぞ美濃の國司なりて遠く開ふ入く彼國府を去る幸約程十餘日信濃國より於くい近道なれば若道を通ぜしめんや由是正範の定る所なり従ふ

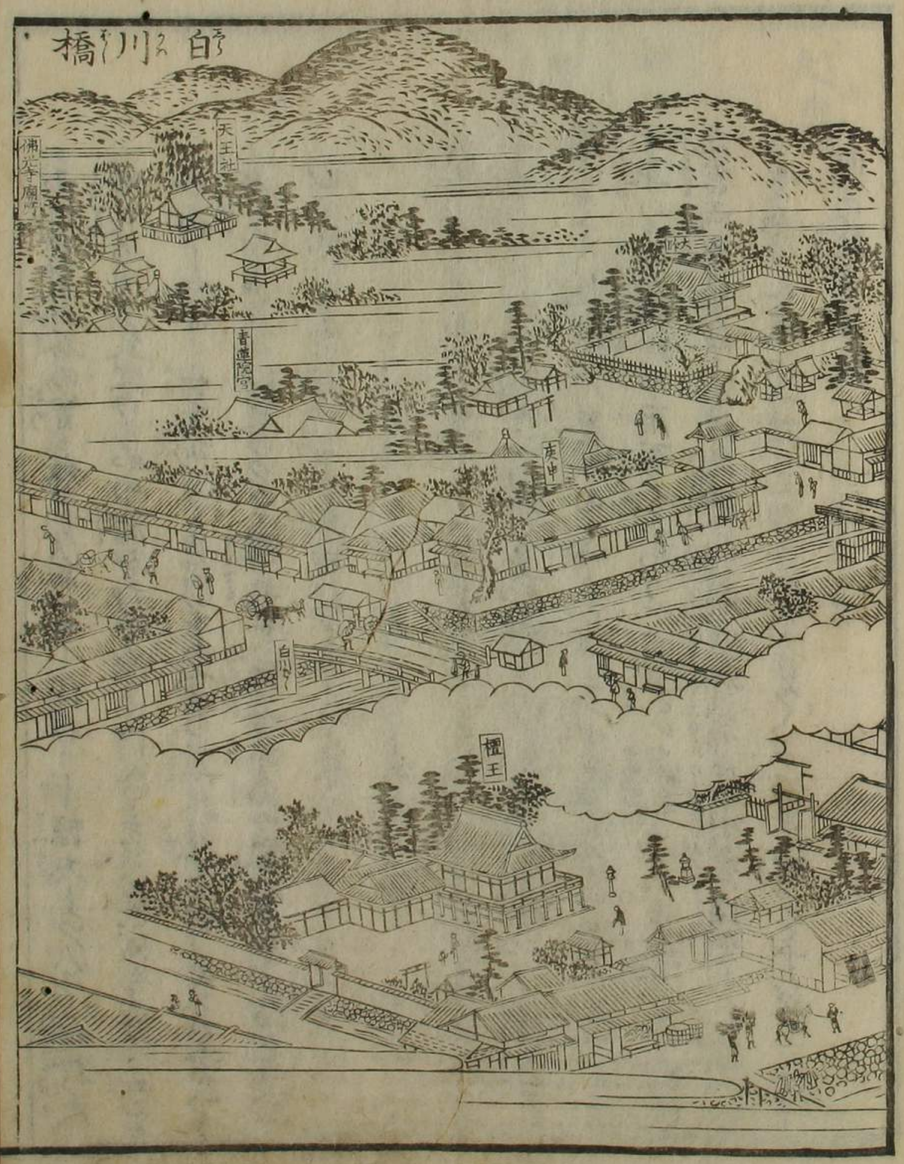
按ずるに正範の定る所六百年餘ふ日本武尊の御紀雁日嶺ふて阿夏麻波夜くせ二度歎うせたまふと日本紀ふ見えたり又古事紀ふ甲斐國より信濃に科野小坂尾張ふ入りて信濃ふ入りて和奇集まりたまへり

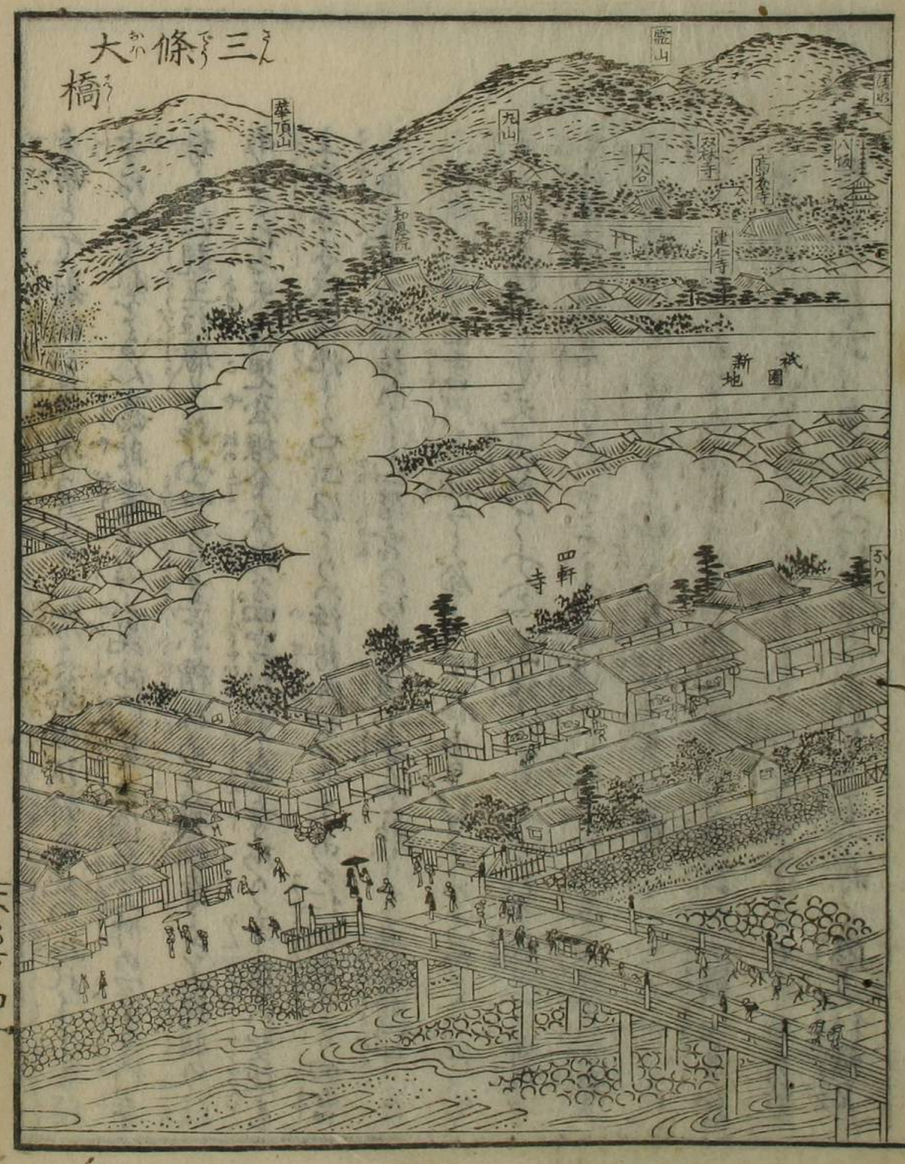
拾遺　中くらひもはるて信濃ふる木曾路の橋乃抓ふる花　保頼光

洛の南風をさふ賀茂の流乃すゑ宮風坊の橋比かゝりぬる。河原院塩竈てふ
古跡鵺島の瘡ふ年久しく見ゆる名のみ残る遠道の名ぐさ残をすさみ
てまづ都園舎ぬけ絶えしいつの畿内をめぐりなまれ去楽しく
雲乃おとぐをいつし七年比出入あけ出入都の東海道園舎を
はづまゆてびゆき吉蘇路を経て江戸ふいつり香取鹿島筑波山
ぬめぐりかけまく畏くして日光の　御宮ぬ拝し黒髪山よ登り
其道芝の名つりし所をたづねてめぐり見。よわひ古稀にちかづきて
簑の霜ふくく眼もまれ衣の袖を見りても倒の瀬捨わ道祖神の
まねきにあひて。ふとしも享和二のとし比夏卯花月中の六月とらふ
日ふ旅立ね。まづ都の南なれば若菜蔵道の路より赴んとて。くだ
ぬく音羽山の道より。秋の中山ぬたどり滑谷の嶺を越て。花山よ出て
山科の里ぬ過ぬ。かく又乃農家よ様金屑丸てふを目ふかけて牛尾
道の別まふいたるこれぬ左よそわて。り。ふ奴茶屋は先祖より居世

名傳よて射術の達者なり今ふ店よ器械ぬ飾る。北の山比手ふ安祥
寺なりこれをさん高雅崇と呼ぶ毘沙門堂と傳教大師の開基御寺
務る法親王住職し給ふ。右ふ日蓮宗ふ檀林あり護国寺といふ諸羽の社
ありこれる天津児屋根命ぬ祀る。四宮村ふ十禅寺なり本尊ハ聖観音
上宮太子の御作とるや。此ほとりハ伊勢物がたりふある仁明帝第四宮
人康親王の棲給ひし山階宮の跡也後ふ寺と成して真慶法印寰
ふ住職し給ふ。四宮河原袖くし錨といふ名ありむかしハ色々の物を市
立しける所とぞ。又道範ていへる人ふ住しより今これを訛りて道暁也
云只茶店の異名とよばれ其より追分ふ出る方ハ京と伏見への別れ
道石の標を立て。裏の方ふ柳緑花紅の文字ぬ鐫たり

先行紀行
ひがし山乃亀なる家ぬ出て相坂の関うち過ぎ駒引るは
もち月のころも中くちて紀行なれど杉青たちて見わたす郷の秋
の月げ風芝づたりゆふけをどりてれ外よ音づれく遊子ぬ残月


白川橋
天王社
佛母廟
青蓮院宮
祇王


三條大橋
靈山
華頂山
九山
大谷
知恩院
建仁寺
八坂
新地
四軒寺

みのもの函谷の有る所なり人あり せきもりひとりなり 蟬丸とひとりの盲人
世捨のかりそめにいほりの家をむすびくはひとを琵琶法師にて紀を
さとりやすと言と弾くに男ひとをのびのあ嵐れ風とうげきに言て
世をうしけるあれ人のいろく蟬丸を延喜年間四の宮あてう所とひふ
ひせんのあうと四の宮と名ばけうとうかうの人と

いろ〳〵のりの屋敷家乃あうほてゐをもむるあふ坂乃関　光行

追分は道三ゑ街路狭して往来れ人こそ行馬あり庵る所興あり
牛車を地なく駕物を積く逢坂とこゆふ池の例乃針屋を月代もく
蝙氣こる旅して針磨さゐもいろ〳〵一里塚茶の尊盤を其名尼。
小車の店大津絵の店あるくふあうて世をの名物とゐや走井の清水輝
丸宮両國寺むろ〳〵れ開所の沢開明神祭清水逢坂をうち越れ
たゆを孫八ん近江の湖をむろふうりるく小坂を町をすぎて大津
八町の駅ふいろれ

大津（京師より近江）

京師ゆりろ〳〵千で三里ゆまるう
茶津まで三里半六町
大津紀行
ちろもむろ〳〵天智の帝大和國飛鳥宮より淡海の志賀へ移ふ
都うりてあ事あて大津の宮をたてゆふ
の跡ぞうりゆえく　光行

ちろ彼や大津の宮ゆれしりろ名のこ残まる志賀の山里　光行

山駅を都よりはるゆめての所るれだるゆ旅金人馬多くこ我うて喧し
渓色のりさゆ淡海國より往せ彼く弦慶の義風ゆきるゆ入れ知れ
旅ひ彼く大津の町乃数九十六町あり此ゆ三井寺巡礼乃観音
今の石系氏の所ろうこと我れ札の辻ろ西ゆ三井寺巡礼乃観音
高観音ゆ近松寺と号して山の上ふあり長等山ゆ山清ぐさ
ひろく墨墨寺の後ゆ掃大友皇子の殿舎跡ふ寺に作ることを
ゆろ彼ゆ国城乃宮と用ゆ五別所の神祠ゆ新羅社三尾明神

護法善神新宮権現熊野社金堂の傍あり御井あり天智天
武持統三帝降誕乃産湯を此水にて指せり又此清水をくく
三密灌頂乃閼伽にくくいとゝ尊三會の曉此朝をくむくもれ
名泉なりて寒暑ふ竭滅なり梵鐘ふ金堂の前上壇の地ふ在
高五尺五寸直四尺三寸厚三寸五分龍頭高三尺五分天竺渡
国精金長の方ふかく法所に佛滅後龍宮城ふ入りゝが延喜乃頃
俵藤太秀郷龍の宮にくこれを得くたくふ雲附に食堂の釈迦
佛を安に赤梅檀の霊木毘首羯摩天の作に此様例ふ大鴻あり
此の度四弟あくくく唐院ふ智證大師の建立寺門第創家初の
所に唐の青龍寺伝模にて中央ふ智拳大師の像左ふ英石動
右に大師の御骨讃摩堂三層塔新山王祠寶蔵に大師唐より
将来の寶ふくぐあり十八神祠ふ南院ふあり燈幢石壇に金堂
の前ふありこれふ天智帝遷居入麻を謀りゝふ其罪障を悔く

伽藍坊第建に真法供書を流しゝ所に紀義ふ豆利者氏ふ一切
経を義む自筆の奥書あり又慶長七年ふ毛利輝元唐幸の
一切経を寄附せくに教待仏人の入定窟ふ金堂の東北ふあり教待
和尚ふ神通延寿廿代仏得くり殿一百餘歳にして貞観元年の春
にくめて智拳大師に見て南山伝附屬に其後石窟ふ入く渡に其
壽一百六十二歳にくく本朝神仙傳ふ三年寺教待仏人京滋賀
郡の人なり百餘歳を歴にくども容顔壮年ふ異に常に魚鼈
伝説に其骨忽然として青白二色の蓮華にくある正法寺ふ
福神石あり人悪図ふ寺ふ昔ふ琵琶湖の八膳服ふ
あり天智天皇行幸朝妻里ふど遥ふ見ゆる五別所ふ近松寺
尾義寺瀧水寺水観寺常在寺ふり安徳石塔婆八詠樓
のよりふり早尾の岡に法ふ在寺の西ふにあり山王廿一社の内
なり亀丘無為塔村雲塔夜櫻湧明水二王門小院中院南院

さてあり国基を智光大師ふして天台宗に改験道を兼る此大師の
廟堂に北敵山四明嶽あり景行天皇五十八年春二月近江国志賀
里に都遷ありし由日本紀にあり今志賀の郷内西郡村に
此地に清泉あり極て美味にして宇佐の社神社仏閣の古水
と見るに水の美恵より今にても賞し蔵よりみてしに岩金
に智瑞あり吉田に明星水黒谷に紫雲あり園山に吉水清水寺に
乗清水其外数所に迫あり浪速に御城に黄金水天王
寺に飛鳥あり所に名水多し志賀山越に赤塚が
登りて水白川に出る滋賀の郡園を新在家に所なるべし是
立絹に比里に所に貫之初に真寺村に常楽慶寺の紀
梵釈慶寺の移に定に比の智光秀の城績に赤塚村の上方
にあり庵僧此庵に移に海に童神と祀る一に紅に樹のめぐり五郎祥
なるサ二丈枝葉のまつり移て武百間移に付茶くに霜雪に

流ぐ千巣に常に潮鳴る移自らげに松の繁ぐに花浦吹
ぐ〜れに枝をくれ無に花に枝に移に鶴あく
と峰に雉子よりあるふ日るるくんと後成郷もよみ移に志賀郡に
志賀郡西郡村に雪に御所内にに今行林の中に清泉あり
これ其頃の遺跡く

古事記云 若帯日子天皇。成務天皇 坐近淡海之志賀
高穴穂宮。治天下也。此天皇。娶穂積臣
等之祖。建忍山垂根之女。名弟財郎女。
生御子和訶奴氣王。一柱 故建内宿禰為
大臣。定賜大国小国之国造。亦定賜国
国之堺。及大縣小縣之縣主也。天皇御
年玖拾伍歳。御陵在沙紀之多他那美
也

古くさい
山科の
道能
座敷へ
通を
人家
建
ぼくれて
今ハ
ゆきくの人
ちゝ
頼ふく
只道時ゆ

ひとゝ
俳の
ゝ
ゝ

志賀里（しがのさと） 今の中に林あり 旧都の遺跡を訪ぬべし

新古今 今よりは志賀の花園掃はでたれか尋ねん春の名残に 摂政太政大臣

万葉 神よりは都の月に縁ありとも見ゆる志賀の古里 参議忠源

志賀浦（しがのうら） 此わたりの湖の浦をいふなるべし

拾遺 浜風や志賀の浦風いかばかり心のうちに涼しかるらん 右衛門督公任

後拾 みるめこそあふみの海にかたからめ吹きだにかよへ志賀の浦風 伊勢大輔

千載 桜さくひらの山風吹くままに花になりゆく志賀のうら波 左近中将良経

同 さざなみや御手洗河に禊せし浜荻志賀の浦浪立そ寄る 八条前太政大臣

新古今 志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷りて出る有明の月 家隆

同 さざ波や志賀の唐崎風寒て比良の高根に霰ふるなり 後鳥羽入道前太政大臣

新勅 志賀の浦に八重の汐路もさへてたえずつけるいかなる人の心かは 前大僧正慈円

続後撰 いかなる人の法の林よりちる花の匂ひをよせよ志賀のうら風 後京極摂政

同 見るめかる志賀の浦の海士のいさり火影をも波にうつすなり 後法性寺入道前関白太政大臣

新後撰 志賀の浦の松吹風のさびしさに夕波千鳥たちゐ鳴くなり 権大納言公実

同 志賀の浦や比良の高根にすむ神も見てや霞む波路の春 津守国助

玉葉 志賀の浦や湖寒て渡る浮雲に二上の山も寒かく残る 藻人志らね

続後拾 あふ坂の山越まで琵琶の湖志賀のうら波 後京極摂政

同 志賀の浦や浦の風の浮縄浮きて絶ぬるみなせそらし紀 後堀川院民部卿典侍

新千 紅葉散る比良の山風吹けば身にしみつくも志賀の浦波 前大納言為兼

同 はるかなる沖の小島の猿も又鳴くをきく志賀のうら浪 法印定為

新拾 志賀の海の白ゆふ花の波かけて霞の袖で浦風ぞ吹く 家隆

新続古 志賀の浦や夕潮の沖に雲あるて秋の夜の有明の月 後鳥羽院

長等山（ながらやま） 大津三井寺の後山なるべし

玉葉 すみなれし長等の山乃岸の松吹ける風も万代の声 前中納言資実

新千載 紅葉散るなかの山風吹く時は花をたゆむ志賀の浦波 刑部卿範兼

大津宮（おおつのみや） 古今の大津なる四宮（しのみや）の社（やしろ）は町の中にあり 精大明神と称す（まつりて）

にあり小松入あり松小栗が淵より船出して矢橋浦へ着し里の口に
なりこれを見れば左あり唐崎の松右あり粟津城と見へ遠く眺望
まだ帆掛船上り須臾より矢橋を渡り菊隠地紙ゆけば義陽村の義仲寺
あり朝日将軍義仲の塚徘徊師芭蕉翁の墨あり菊が淵と号
今の松本村を過ぎ石山寺記云むかし宇多天皇石山寺参り幸
し給ふ時淀海の国司大伴の義とりて入江淀小舟宮を造り
給へれ菊を栽へ清水幸地答庭を敷江故に菊が淵と号又玉造
の名なり大内裏の御ゝ江地にて瓦を焼調進しける之今に瓦師
あり膳所領の門を入まで城下の所ありこゝに幸彦六男石を祭せ
給へ城あり湖水へ着て風色いちぢるし一所に八大龍神宮右の方
小泉水寺新堀地ゆゑ本地にて近ゆゑ八大龍神
の社なり中道あり膳所神社の方瓦の淀小陽宮七清水五条線
若狭社名国畑の社と中古小牛頭天王稲荷社あり宮所小若

宮八幡宮新羅明神あり故に社歪五ツ有りて五ケの社ゝ
なり今の膳所ゝ粟津ゝ杜聖海ゝ古緑ゝ

後拾 関越て粟津の杜社あり清水見へ新古今

後拾 あるの歌社すゝの篠角見へ立ゝ川む駒をつゝあり 俊人ゝ

新後拾遺 いさゝか小ゝ哀あまて隠雪社粟津の小野小若ゝ 藤家

新後古 粟津の葛社東粟の陽るまて育やまの色家の命ハ 右ゝ陽宮 弦師

新拾 相坂の名社者を成小ゝわ小ゝ世乃ゝ

あるゝ小ゝ名ゝ

新勅 東海社のゝ社東ゝの霧ゝ上げゝ川もゝあるを神ゝ上ゝ

膳所ゝ小地名ゝ美行乃ゝて山ゝ小の春七日の用ゝ五ケ所の門 擬ゝ内裏王家 粉津

頭屋を立ゝ其家小猿の幕ゝ社ゝ上ゝ社ゝ人乃十分一の初穂を

更ゝ社ゝ上ゝ山門ゝ九十九浦の初穂十分一を神

供料ゝてこれを支配ゝ粟津世義陽煙の両人小受ゝて

粟代仮の神位を四十九膳調へ例祭の日音楽献奏して神位献
唐櫛の沖ゆて待古刷其古祝文天福元年四月一日と有り右大将源朝
臣と渡さるゝと我今を山門の古刷も慶して御膳所の所ゆて汁実
の者ゆ不絶の初穂を受く神位料とする
田畑の麻〻弱陽を清水あり是れを吾孫君の初とゆ膳所の所ゆ
の渡ゆあり山王ゆ日ゆ八うゆを御食献位ぞるゆ陸膳渡ゆて
即ち地ゆんむ〻解奥を日沢ゆ貢せ〻也古ゆ溜ぞるゆ西
変本　次ゆ氏ゆ氏ゆ氏ゆ氏ゆ寒くゆも日沢の陸特ぞゆあい　横人ゆ
國分寺の古孫ゆ今の別保の業師俳ゆ
幻住庵ハ粟津原の者ゆ芭蕉翁の遺孫ゆ三ゆ世俳家ゆ
沙ひ自筆ゆ深ゆひ〻絵石折ゆ出ゆ山ゆ代ゆ古跡ゆ西
沙の遺物ゆ有ゆ幻住庵の記ゆ鴨長明方
丈記ゆ有て書ゆ

本巻一ノ十一

今ゆと存ぜり系勝の所〻
はゆ〻ゆむ　椎の木ゆ有り夏木ゆ
西平境ゆ粟津原ゆ有り西入ゆ寺三所ゆ有り
鳥井川ゆ八沖ゆ霊社あり大友皇子を祀ゆ
見ゆ代ゆ有ゆ石山寺ゆ蟹谷を西ゆ東寺ゆ岸
ゆ石山寺の旅ゆ有る門ゆ代ゆ新ゆ藤原行能の筆ゆ有り背面
ゆ仁治元年十月十三日従二位藤原朝臣行能書之と有り年
号二膝如意輪観音ゆ長六寸聖徳ゆ作ゆ代ゆ是れを腹内ゆ
良辨僧正丈六の像坐作せり今の本尊ゆ是れ脇士ゆ右執金剛
神右金剛蔵王二十八部衆ゆ不動明王内陣ゆ安〻五面俳
舎利弘法大師利生名号ゆ八重巌ゆ幸ゆ御産ゆ有り源
氏間ゆむ〻〻宗弘の須世系ゆ武部世寺ゆ手紙ぜん源氏物語ゆ
書ゆ所〻硯石ゆ源氏間の霊宝ゆん武部の石ゆて色ゆて

源氏物語を書かふらふ新ふ牛と鞦との雕物あり海二ツありて濃
淡の色分〳〵なり大殿造にて武部が自筆と三十八所社を富山
の社の字ふり法華の十羅刹女ふ千手の三十八部衆武部く虎川ふ
紫式部塔二層塔を建久の頃新郷の建立し給ふと本尊
を大日如来ふ四隅の柱りふ三十七尊の画像にて丹青妙麗なり頼朝
墓改ふ尾墓絵を孝謙帝勅〳〵く一切経を写さ〳〵光く花め
給ふ観見亭ハ本尚の車ふよりあり又鏡胖亭といふ湖上の釣舟
あるを勢田橋の引人眼下にありて清幾なる山亭なり後橋を中
堂の絵ふあり武蔵を絵文ふりなり〳〵を石山記ふにて御新造を
中尚ふ弘法大師左ふ良辨僧正右ふ円供僧祐海ふ八祖の画像
あり八宗接を沛新造の西ふにて岡山良辨南都ふて裁を
絵ふるり右樹を植く植絵く新紫石比良明神ふ西ふはるゞせ
なり山形ふりく巻思沙尚を石階のふ人ふにて食堂を下壇の地ふ

にて聖傍文殊弘安比良明神新石を食堂の南ふにて絵庭
樫瓶を尚山の絵字〳〵鏡形橋現の別社なり寂伽井を下壇の地ふ
あり水源を本堂の下れ石り流を出る此下流をあり川なふ天狗
杉い山の八けふにて柳が滝と暦の北本堂国禄の北新造なふ
飛出を絵ひ柳乃枝ふ伸〳〵なふ絵完なり〳〵を寂伽井の奥
三所許ふのりもり〳〵なり此霊崛あり〳〵て寂寞なる所なり実ふ塵
外の仙境なり〳〵て屋北を暑なれども池水涸ども〳〵旱魃なり
絵風を彩〳〵ふ画絵あり虎意石を比例ふにて〳〵歴海和尚なり
乃上なり〳〵て少なふ孔雀絵を漢画〳〵絵なり〳〵ふ絵を壇上ふ昇絵新池中
〳〵案出現〳〵て和尚を敬ふ〳〵け和ふ我〳〵義平墓を絵完なり二町
許奥ふあり山亀ふ亀を義平左のび〳〵城雑殿六郎絵房を捕
て六波羅く引く強せ〳〵幸平治物語ふあり山田絵ふなり〳〵く
なふ墳を築くなり〳〵ふ屋敷を山亀ふにて義平ふ意なふ

徽しげてもぎ庁履岡之尚山の嶽坊ふ厚祐尚をそふふ遠しく
昇天しぬふふふん柿尚山ふ天智帝ちぐるみ大津の宮ふ在せし時
慶雲の往端をそめて聖駕を舟しぬ附いまぐ仏蓋の紅葉時雨
ら民其度聖武天皇良辨僧正ふ招かれて八葉の巌上ふ仏蓋を
営万代の宝祚を護て勅願を祷しぬふふう

石山紀行

稱名院公條公　西三條

去る年の秋乃比泛氏物語れ事るぐれる迄物ぐうして八月
十五日石山寺にくむの武勢が参ぬたて〜昔の事武ぐるぐう
ぬくれはくく本乳あられ通家して四〜こ乃月ぬ行くもぬ水
ゆて既ふ却りひぐち像ふ法乗のこ光うの名歌を上ふ三ふく
十五首乃三帝城はぐ寺〜ぬぐもさる事なりて世ぐうくぬし
行ぐと此事を金后きぐう〜光〜はきくけぐば家行あ人炎
よ〜ぬう和来世ぐめぐうにふ事東洛ひて遊屋ふりくぬし

ぬて續申一部の功坊ぐげ杉う〜ゆて久わ又宗祖法師
紹巴法師ぬ迄も同聴の業るれぐいぐ形ひ行〜こいてこ〜ぬにりを
とう〜ん者ふふう〜ぬの源氏の間ぬ行くわ乃て十百韵ぬ連歌
坊とゆせ〜ぐば不堪れう人老懐いうぐ水毎ひるぐ〜驥の尾に
はくべきよ〜ゆせ〜ふふ〜ぐば数句の題るわの抱ぐうわ巌
目録をとゆて若葉の数句坊ゆ出〜行〜ぐばをのくこの心
坊却りひめぐし十ぬ数句をぬぐめてこと〜天文廿四年八月十
四日ぬ却りひぐち書をるぐ行るる程の色くをみる〜ぬ色ぬ
はぐ人乳栗田山うちこえ志風吉志〜ぬもたちとぐはる根坂乃
開坊こえうちぬの涙るぐすぐ乳はぐうわをのく家物をう〜
ぬの南寺ふひつぐぬ対ぐわふはきぬふ〜きのびくゆはぐ先
てりきぬの有坊なぐうぐてゆさぐむる事を形て玉藻州
はくかげうて家弁ぬ月ぬ月ぬ数ぐきう〜ゆて楽はくて

かの源氏の間とて是をやまあてあり。此坊ゐど最上に世そ度
とて志ろ所へ或坊志ろ人は是をそ〳〵ふ坊ゐて見あぐし仏ふ
あるうゑ所さしくよ海〳〵きゐるれど海山見毋まく西にあ所
いづくとて又弱は所わきに舎の坊とやい乾月の杉絶り乾と
ゆゐる乾名と和ばえ〳〵貫ゐは勝毋の墨〳〵車拭ゐ〳〵漢高祖
ゐ箱人ゐやどわをさ〳〵ぎ所ゐ〳〵ゐれば物の貫ゐがゐみ毋の
島の名まかゐれ也ゐあまばゐ見侍ゐに志ゐ図山あ家
姉の所ゐ湖水ゐ〳〵ゐれ〳〵ゐ見ゐて〳〵ゐ新〳〵ゐ洗月ゐ行毋
又一休老師江山一覧と題き〳〵墨跡ゐ行家江山京事ゐ氏
茶乃びゐ〳〵援番光園摂政の月乾山風ゐ志ゐ〳〵蛇有
〳〵連奇氏舎席も此坊ゐ我ゐ侍乃乾あ〳〵にすゐ所前
あ〳〵四美備ゐ所不乃ゐ毋て此所ゐ侍ゐあけゐ大ゐゐみ白
形ゐの舎席は須光風ゐて見ゐ〳〵き事ゐ〳〵ゐ

ゐれゐ氏四人の名ゐ〳〵れ高山乃詩をたゐ〳〵蔵ゐ所ゐて
月紙送ゐ〳〵ゐを金后の所ゐことゐてゐとみ所ゐ〳〵ゐ
ある時ゐ坊より侍所ゐるひゐ〳〵ゐ世月ひゐ〳〵ゐ十五日
よゐはすゐ月ゐ〳〵ゐ二百韻ばゐ〳〵ゐ五月ゐ所ゐ執筆ゐ乾
既ゐ紀系ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ
ての月のゐ〳〵ゐ年〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ清光海〳〵ゐ薩摩の光明光ん
そ〳〵ひゐ乾ゐ〳〵ゐと見え〳〵ゐ〳〵ゐ月ゐ一月遠ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐて
世尊院ゐて百韻の連歌あり丑一月舟ゐて還向〳〵ゐ侍ゐ無遊ゐ
ゐ海ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ舟ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ
して半ゐ〳〵ゐれゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ
感〳〵ゐ〳〵ゐ

詠十六首和歌

南無如意輪観世音菩薩とゐ〳〵ゐ坂白の上ゐ〳〵ゐ

大津
小松へ
あつた
石場
の
渡口
あぢまトマ
伊勢やろう
そ
松乃
こぞるも
此所の
旅ひ
うるべー
屋
大
水

矢走の
嫁と
娘よ
裏の風
古祇

なびきあつまりて一茎のこゝ姉乃さゝ風
むらゝゝの花のうへにあれ小萩ふいや色〳〵し花咲はみゝわ
にてゝとわ侍るあきけまあつまのふりたる嶺の深草ゝん
萩をはなれてゝ杜ゝゝのあり人ひとはをとゝ松虫の鳴
いとゝ秋ん月あかゝゝして花ゝゝの物ひとをゝ心すゝめる秋まれさもゝろ
月人きむと見渡を彩れるちにさゝへ月のうけのうゑ
むゝ雲れゝゝまれ月の物ひとゝ花ようちにまれ中ゝを
くゝ来をれ月れゝあるれ鏡山れてをく心中をゝわきや
て秋ゝゝゝゝ秋ゝ来ゝ時れ新屋れゝちはまゝり
月ゝゝゝゝの中月り駒乃河ゝゝ雲乃物るあゝさのやま
せれゝゝるゝのゝ芝ゝゝ山ゝゝ楽出ゝゝゝゝ
物り花あゝ人乃ゝゝゝとよゝゝゝゝきゝゝ宿のゝ嶺をゝん
むと若の芝ゝれゝゝのゝゝゝゝれゝ杜の中にすゝ嶺

横小生ゝ分りゝ物の神ゝれゝ雲にゝ新弱ゝ
はゝゝゝゝをゝれゝゝゝ年月ゝ来身の老ゝあれ風の床
ゝをゝゝゝゝゝゝ本にゝ花をゝ紅ゝゝゝの杜を契ん
此おゝゝ伝ゝ金石剛言あり
長来ゝゝのゝゝ我海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月ゝの海ゝゝゝの月れゝゝゝ物ゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝの物ゝゝゝゝゝ泡水のゝゝ秋のゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれん秋れれ秋ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれ本ゝ杜ゝ城ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ風をゝゝ待ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月ゝ物ゝ秋ゝゝれ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

烏羽玉の夜も花とすゝむなるれわかに緋をと秋すゝん夜ふかく
せんとめて至る半月日坊主も花ばかりの菓も志さ氷
声をひく修行の波もうち出の濱にさゝ神のあさ風
むすばれつる身をうるとさせあれさうすはる船と見ほや
煩悩も菩提もひとつ寺にまかるとせもおすのかう月の霜重
されつゝある秋ふけてかれ手と契しられた相坂のや乃
はるてとく御法の声に浜の梓の雫も露まであさる浪

石山詣之記　長頭丸

三つのえねの秋石山寺に瀬戸ひろう道路へとて京を出ならは
をこれよりみすでみかまくへ行くときて逢坂の井に至れは
どうわなさどそのかされなきいそづくもすくとぞそのたまわ
おさ暁より出行きも月中の出るをば月をば羅をうとくて
たる中にきゝく比山の鐘ちかく法の出されは上宿の風聲

忘まくたゝしのすゞれ手をたゆまきでうげやくにゆくあけ
おくまやるの時をさむに関の寺ふひしけもそもちちく人
了息あるさればさらぞて今はみつゝ比浦をおさひする舟のる
ぢらはけつやひの日のうちふの京都をれども山一つ所ぞ道をや
ぐるゝ見ゆるにも源うする橋よりも人も出中ある
あまたを見と志かねかれけでうるましまれくそぞ心地に流るれ
之遠中を花程られぬ京紙ばかりのぞ志す野を勢田のうわあくて
行あゆんとかたくちぶるにさつゞく人をとくぬ御拾待をぞ
ぬるやのわさん橋のほてわきま見へぞ此之だ揃をゆるや
志ぞもおうさぬて中のくふうち米湖水湧く風巻浪の小山ぞ
経渡し岩と入るをおうけれり声れはまたれだ志かりぬものゝ入す
これより石山へまたぐ一すぢれ道れば中がふ屋きうらでれみ
参るゝる田ひくあ連まて行路へ一比の時をぞゝ色ふ斜ひく

ゆくは道心者さわあるあ人どもの中にはもれなどをえんぶんやうに
はきそてかくらして待まそれ年経くあまたが中にたがひの嫉く
志らく心がくれりくのぼるよよ絶えれしあれにうたくまてなる城
見てはくいぶれたよ高く山の高きを拝ひなし心みれ人志わ姫
神仏を拝さまんと堂乃前にゆく小堂へまなちぬらし
秀頼公は御母堂乃その世後の世は御孫ひのうち流くてわり
心うへくてたのもしくきこゆる事ともなし拝げ申る月のみな
のひかりあひらるをいとたのもしう流るる山の流れにひかり
海をみれば世るの長橋も目のまへにみえ此山岸称もなくたゞ
ひ所よくたゆる小舟をはわりすれ事やすらんゆきうふへやじ
の方し舟にやあらん心をりきあり前にさす々を浮来まと
小舟うし此手枝はねの方とるもられをうつせとうでさひ
まづくの思へしすはあしれくらいやむでえはじむる原し

の物語も世に知りげよわおもひたちて書をあつめ作文つ之侍れば
けふも世々の年月をへ待ていづれもすゑの人もみるればこそ乃ぞわ
まうれ所よくもむもてなるくぞよくよろづのめづるふかの長能が
筆にはとをまてる秋の夜乃月に世よあたもその筆は事にや山と
いつの世よりいけの世までもとへ此もを志らんおもひもすぎうとで
侍事よなれば人をまれらくわなるやて名のそ残まうらまふぞおくさ
あすれむしる事べしそれよわ源氏の間ともて所あり事てされ
人くらずすれをみてまでへ見る事もれ給ふ事丈げうわの所侍わむとさ
とも式部よもえ申しられぬ年のどもの拝がめば拝がむつとしてずぐ
すわまはるを拝しまいふるくたぐふ人書さすぐられをも人之巻
なれどかくらるる坊まやぶれて古き紙を引あて出付やる
うみもつむし硯の石山やけふ名をもる紀筆の跡かな　貞徳
友とするかきこ乳を残さしの奇ふられるくてなまだ世中まで

長頭丸

石山即事

秋風識我石山行今日吹晴湖水平比叡峯高
懐寺古勢多橋偉見虹横

澤菴和尚

石山紀行

有故人従故國來十年不話亦親哉洛中相伴尋
佳境關外勝遊自是催
坐出紫園向洛東第三橋水更無窮粟田口外
數村末逢坂留名關古宮
蟬丸曾引琵琶殘澗水松風五月寒關寺跡荒
留礎石小町今已淚欄干
太陽停午太津津此處即是打出濱風收雨細
水無浪萬境清湖一色新

大江之南淡津森常聞悲風怒濤音吊古戰場
思舊記并平家後猶若今
渡景山田矢走舟長橋卧浪勢多流遥遠村路
有層塔此夕借房投宿留

○

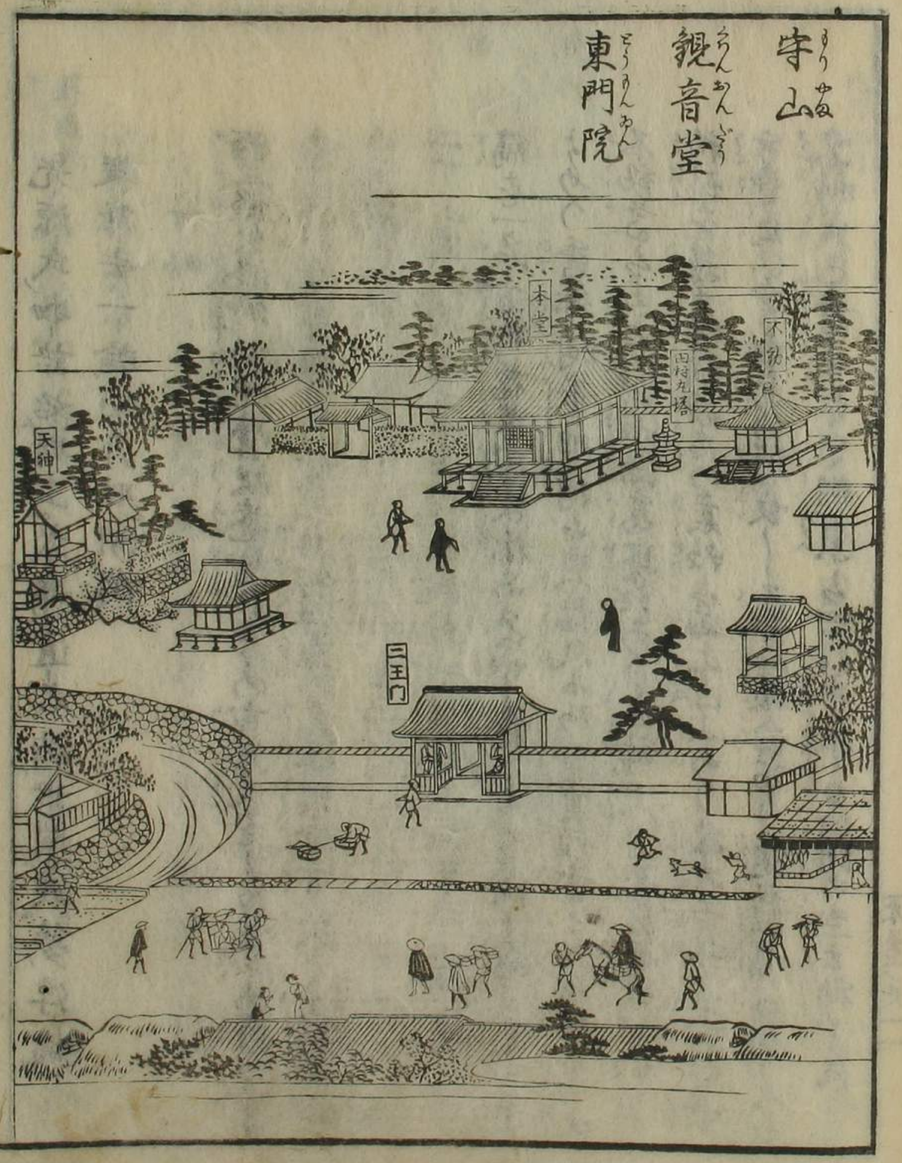
此處即是石山也本尊者二臂觀音也見此山
致境漫々湖水在前洗肉眼峨々岩石在後轉
塵心溪水説法山風談空可謂上求菩提下化
衆生矣往古者湖水窮而無下流故今之觀音
堂者古湖水汀也怒濤顯山骨如大洋海岸勢
奇石怪巖難盡詞船繫岩釣磯于今儼然寺僧
語之鐘聲頻催暮帰宿房吉祥院同宿者如玄
南都玄齋兩翁也院主茶菓點侍叮嚀也山之

緣起霊寶無所殘披閲夜將過初更五月八日之在
半天微雲遊之雖然菩薩之慈月明々物外而照被
群昏誠不瞻仰之卒賦小偈
歸命石山觀世音補陀刹界別何尋縱然天上被雲
覆菩薩清涼慈月陰

○

翌朝又伴院主入堂開紫式部閑居源氏間則上
間掛式部之遺像本堂雖近年再興源氏間者古
楹猶存以是為證云云聞說式部上此山則源氏
六十帖浮漫々湖水上矣此證實不虛院主師弟
携酒數刻有興玄齋法樂之音曲一聲皆人歌聽
雖興未盡各下山又向舊路歸矣越不可無小詩
叩信口云

寺山
観音堂
東門院



光源氏物語始斯山式部遺名満世間渡夢浮橋

縦帰去一輪明月照湖閑

下略

西三條公條卿園陀磨沢菴和尚そのの古記文をよみて如の道小路の
あり痛菓師を抱しむ古紙幻住庵の意孫國分寺にくく玉樓閑雅
の風騒拭却しいくの清水經塚と見めぐり勢多橋小町宮小橋長
二十三間大橋長九十六間高欄葱宝珠絡を造営毎小其年号を
鐫き一名青柳橋勢田長橋あるいは橋ともこれ橋ともいも
よあり秀郷祠竜神祠を東橋凡ねたり雲住寺これ紙守を田上
不動尊を田上川の北深高峯にあり左神と号し塔を敷く
祈願を義る後頼多居の意祈を田上とふあり猿丸大夫が墓は奥の
方曽束にあり勢田の町長一軒宿舎あり建部明神の廟ろを
乗神大巳貴命なり例祭毎月中午日此地の生土神とし

本号一九一

光行紀行

あけぼのの空にうつりて勢田乃なごけ一うちつれかどす
こづうみはるるにあらはれてかの満堂明ふ比叡山
さの湖をの我みてよ秋を久岩ぬ生まるまく
こ武ゆくこれ乃沼代白波はるとにもうつりて心
ぼそく　こ
員の座すひして勢田の町を過ぎ此所の名産を種魂法よに
ありうるだ乃勢田を奥の上流ゆて漁乃るよ一味池郷小橋まて
よく新乃婦く組さなり魂も亦あるく味ひよくこれより三間栗
屋砂川やうだ乃なごるとく大沼村ふるく新大堂新田を越まで仏の
寄よ月瀬の池ありうちく漫り池雑天池月瀬新田大町光栗屋
乃茶屋村ありう野路の篠原此古形さ小玉川の沿ありこれ六つ玉
川の其一なり

新後拾　さを鹿の声むも森小秋ふく月も遠なる野路乃玉川

左宰相中将光仲

寺山
檜観音

中ごろ風雨あり 祭神は應神天皇なり神功皇后なり
武内大臣天武帝の御宇白鳳四年二月十一日大中臣清麿勅を
うけてもろに勅諚して其後建久元年右大将頼朝卿上洛の
時馬上より歌をあげくなの面一絡ありと尋ねよゆへ報先
の所のうし附社檀再興ありなどやうに板木矢倉にも鞭拭多く
奏なり

草津（近江）

守山まで一里半は駅東海道本曽路街道尾張道等候
にはなまぬ駅一宿中ふ立本の神の面一絡上品寺駒井氏
ぶ居人石碑の多ありなり見るべし

東海道東海道別道乃宿端れふ石標なり右へ曲る是東海道石
部の駅ふ出ふ直道なり東山道本曽路なり此手で東海道
名所図会ふ云ひ出るれば御見原氏の本曽路之記ふなふ
のこ拡補遺してもふ拾ふく

草津川常に川橋あり森敬生水多し歩行りて渡し此出水
俗に水源を金勝谷と云ふ谷を遡て未だ山田に流水に入
栗津の駅駒井の家多し流て野の曉に出る磨崖井村流川村
是齊が出石あり和中散を賣るなり川村を過て徒村に社有
大寶天王社　桑神　素盞烏尊大寶年中疫病り〳〵時こゝに降臨
〳〵新向の松あり此邊に二十餘村の生土神と成る例祭四月
十二日生土子此中五ヶ村より頭を作り〳〵神前にて頭に名長の
頭大寶天王宮本社南向側に若宮十禪師祠陸橋本社に寄
然為て町むく成る〳〵閻魔堂村より閻魔の像あり小野篁の作也
〳〵今宿村に志津の橋あり〳〵これに栗太郡野洲郡の堺
武佐寺で三里半南宿の入口に守山川あり橋孔に称名
寺〳〵西本願寺末のちより蓮如上人建立之金子森
此所より接〳〵なるとゝより守山古歌に

守山道江

古今
走り森岸の河瀬を行くると山の下紫の色深紅なる　貫之
嘉應元年高倉院御幸の時曾禰記方の
神あそびの奇遇に國守山とよめれ
千載
皇代やと栗代の神遊ぶと成る守山の名高き
宮門に永龍
式アヤ
賀業
新古今
走り成るとと成るなるきたれる山の山人なりし山ゝ
養淺雅純
續古
この頃の月に乗じてくゝるゝ山の下紫の木々しの風
貫之
玉葉
守山の岸の紅葉を散ゝわけ成る色のゝ〳〵を
後人
新撰拾
人めゝる山下ゝ紅の色深紅なる者法師
支木
野の輝の波ゝ成る山の走けみ成る本ゝ成る
為相

守山観音堂は駅中にあり天台宗にして東門院守山寺と号し
本尊　千手観音　十一面観音　両像共安し延鎮の作
桓武天皇勅願にして田村将軍代建立之尚山延暦古寺にして
本堂の側に因村婚不動堂にあり結ぶの天満宮勅願〳〵鬼門に
二王城安〳〵侍に弱徒堂あり

帆柱観音寺駅中にあり天台宗なりて意眼寺と雖ん

本尊は十一面観音長弐尺許むかし傳教大師入唐し帰朝の時
逆風船を驚し忽帆柱折おろし海の魔大師十一面観世音に念
じ逆風静まる事と祈誓し終よ速に風波穏よなりて帰路
はしくにわ国益其帆柱をもつて大悪の縁を祓をうふ安しのよし

野洲川　新勅撰海道模田川の下流こまる他わよへは河也とせき入く
玉葉　書うたみこれてけと国よりけてい祈りてあやすの河波
新拾　旅人もみな法花ふあさえくこ陸うちりて長安寺の川考
哥林　わう意ちめさへいつ　早苗とかせ寺の渡りされさあし寺の川田さりうりを
海道記　田中うちつ氏老折けるく蛇行の農夫義ちくあり田を
うつ麦ノ上行屠れるれりて乱ぐあし。畢女うちもれの田の
面ふ色ぐはず存ずかたびくふ神をあ上そうりの小河ふ河そし

後京極摂政
安嘉門院四条
俊三位行家
義秀

揚ふ風たちて警のこゝ人もうちつゞひて所の編戸は垣根も
みな荒暁すゝしく山時鳥きのひるゝ。やゝて三上の嶽と眺
て聖測川をわたれ

いとあらすむ測川の水ゐ人よりてこるもうれしきもあれ

御上神社 延喜式内名神大月次新嘗祭名二上村と書ル 聖測川の堤乃西六七町許ふあり

祭神 天児屋根命 左若宮天照大神和魂を祭る 右十禅師天瓊々杵尊を祀る

末社竈殿楼門あり當社ハ大むかし孝霊天皇六年六月十
八日祇園例祭ハ四月二申日若宮の神事ハ九月十四日ハ三上村
の生土神ふて神武歳京ゐ御社乃林園廣くして森然たり
鈴の音ハ紛〳〵ふ聞利生の垂跡ふ多ゞ一心乃来詣
謹敬ふ〳〵ら式傾まけるゝ者庭ゐ〳〵人を殊勝の霊場
ゑ思われる

三上山 一名杖山 俗ふ湯殿山 もて神社の上ふあり 登路十八町 ゐ〳〵 五十町

本書一ノ九六

拾遺ふ八大龍王の祠ゐ〳〵毎歳六月十八日祭して遠近来て登山
千早振三上の山に榊葉ゝ生ゝ陰さゝ人ゝ世ゝ陰さる万代まてよ
は千ゐ〳〵榊と名ゐ本しとする

月 第式を三上山乃ゐ〳〵ゐ人やゝものゐ河水すゝ世ゐ人ゐ 元浦

千載 ゐ〳〵ゐる三上の山乃杉もゝや八百万代の志ゐ〳〵ゐ 後京極摂政

後拾 雲隠ゐみゝ〳〵ゐ乃山の秋風ふ付ゐ波きゝ〳〵ゐ月ゐけ 伊勢

彩霞抄 玉槻ゐ〳〵ゐ色ゐちよゝてみゝ〳〵乃山ぞゝ〳〵ゐ人 民乃経光

月 ゐ〳〵ゐ木ゝ〳〵ゐ三上の山ゐ世ゐ〳〵ゐ人 茅中納言家仲

玉葉 夫婦の浦ゐ付ゐて波ゐ浮雲ふ三上の山世ゐ〳〵ゐ 後人ゐ〳〵

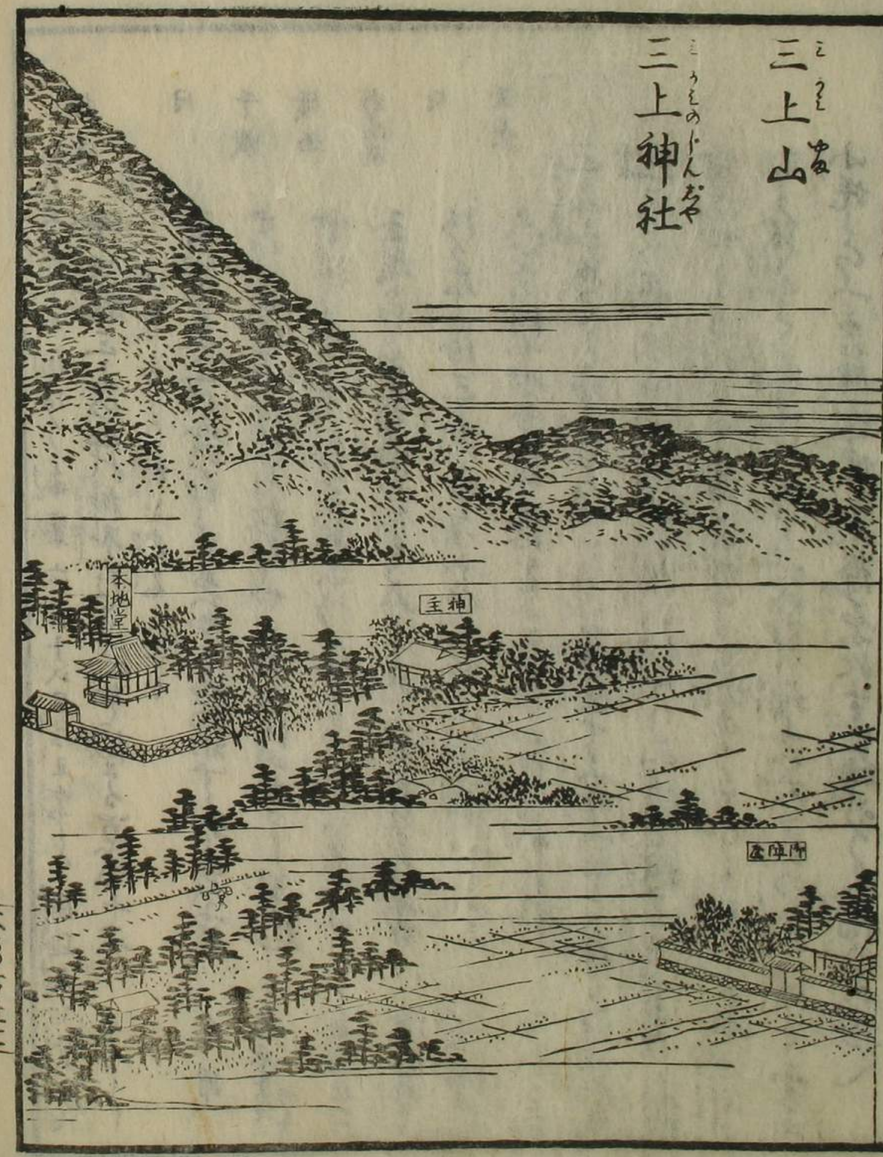
三上山ゐ〳〵ゐ足ゝ〳〵ゐ世ゐ〳〵ゐ小篠原て〳〵中へ出ゝ〳〵ゐ顧ゐ〳〵ゐ世ゐ〳〵ゐ敵の

山三つの峯ゐ足ゝ〳〵ゐ富士の煙ふ紛ゝ〳〵ゐ三坂を越ゝ〳〵ゐ川ゐ〳〵ゐ右の

方ふ〳〵ゐ〳〵ゐ世ゐ〳〵ゐ傘ふ紛ゝ〳〵ゐ〳〵ゐ右ゐ〳〵ゐ桜ゐ〳〵ゐ世ゐ〳〵ゐ辻所

む〳〵ゐ世ゐ〳〵ゐ矢棟川ゐ〳〵ゐ矢のむ〳〵ゐ村ゐ〳〵ゐ矢ゐ〳〵ゐ世ゐ〳〵ゐ人ゐ〳〵ゐ金ゐ世ゐ〳〵ゐ喜ゐ

小堤ゐ〳〵ゐ世ゐ〳〵ゐ篠原堤ゐ〳〵ゐ大篠原ゐ世ゐ〳〵ゐ神ゐ〳〵ゐ又糟の名ゐ〳〵ゐ



本百一ノ九七

篠原社　篠原村にあり此所の生土神なり
白川七百首　古篠多し

新古今　世中いとうたてさの柔風ふたひ引人の袖のなつかしき　為家

続古　哀とも風寒し志賀の浦なみの霜の上に月やさえまさる　後成

平宗盛塚　篠原社ひがし海道の傍なり宗盛の八幡の合戦に捕
進ずるとて首を打れしなり人
皇子の御首洗池　別当寛盛の首あらひ池とて加賀国篠原の名ふり
てらくみ池也
鏡山　郷人の説曰天日槍の鏡を祝しより名付しなり
此南にて陶人と称し陶器を作る今小土中より出る後志賀楽よりはるかに
古今　鏡山いざ立よりて見てくゆく末かけて老やさめると　大伴旅人
同　あふこのみ鏡の山を立てれば見ゆる君をいつしかもせん　仝
後撰　鏡山やはらぬ色にたちそへて紅葉あるかな花の色をうつして
拾遺　あよ鏡山春より後の色やとゆるかな　坂上是則

全集

新勅

大嶽の峯吹風ふ秀もれくる月をうつす芳

新後拾

法眼源素

焼ふ哉

二条院讃岐

月

兼助

嶺山月を出ぬ初もうつる春ふかし

風雅

続千載

岩戸あけ心開のうつる春くらき世の光ひ

新拾

四三伝宣数

ふ月の海路の初尾ふ向れ嶺の山ぬけふ時をわ

新後拾

為家

嶺山ふ雲ふ初ぬ月をれいひ嶺ふ成ぬ春のうら波

安嘉門院四条

竹林

後頼

附月帰春れ新のうつれいかみの山ふ入るうら春末

光行紀行

如ふ乃之宿ふ泊ぬ春ふ七夕乃寄合ふ恋ひ

てよろこける寄れうちふかみ山ぬ之よわ

ふ山寺うやと毎ぬ之く宿ふ泊り乃ふ恋ふ

さ清ふとゝ山ぬ之ふ

・讃岐左大臣

義忠

法眼源素

ぬ之ふ乃之ふ山ぬ之ふ乃之ふ乃之ふ乃之ふ

繞宿

寺山ふ入れ之ふ繞宿ふ入ぬ

牛若九投宿家

今に此里の神ふ変ふ入ぬ

長者碓

今ふ長者の名を一年洪れ

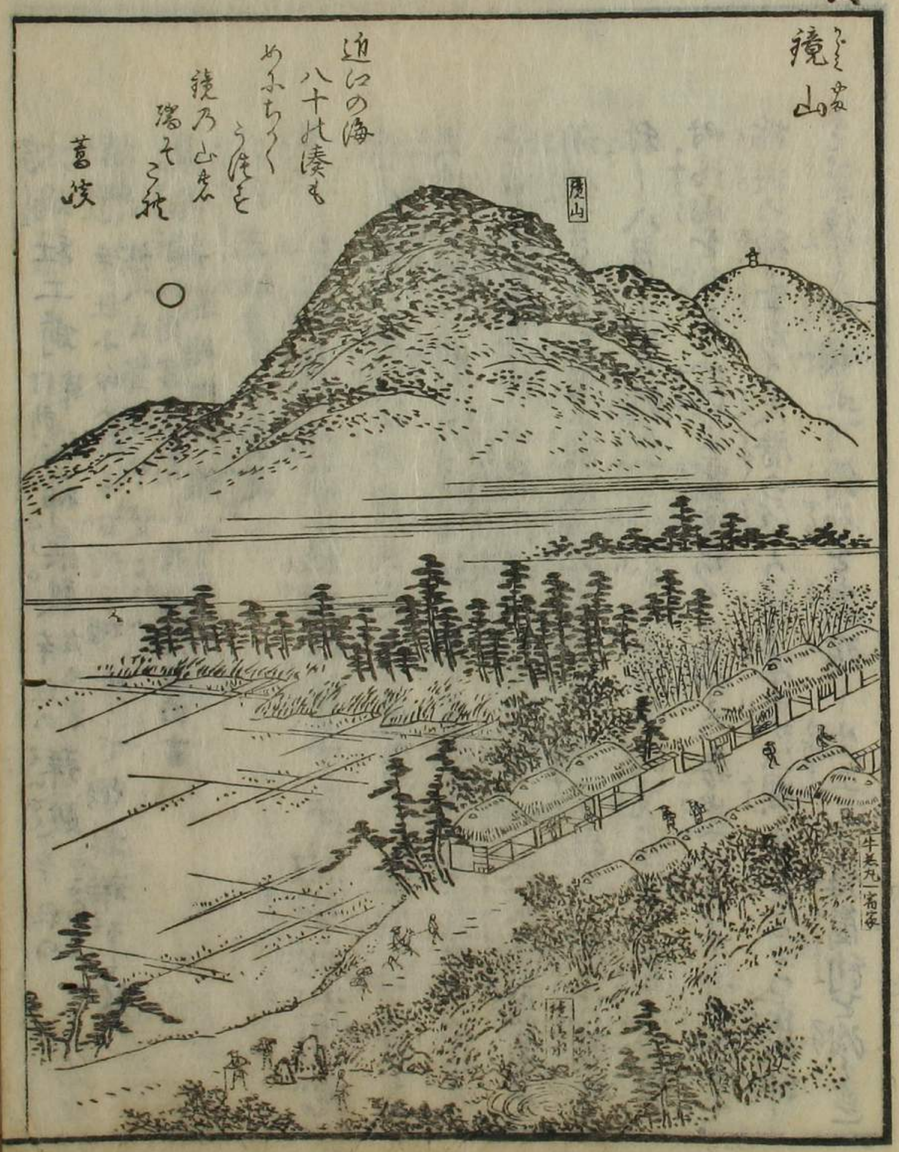
是ふ繞宿を過く長光寺川ふ流ふ土所村へ出る

水口への道ふ西横関ふ入ぬ

十蓮坊塚

右の森の中に

馬渕縄手の双樹の松原二十町許ふ



武佐寺

長光村ふあり

本尊千手観音上宮聖子の持念仏なり寺前より霊石有

女尾石なり又八尺餘の香木あり南寺むかし武川領なりし

者なれば創に故ありて武佐寺と唱へ此寺に祭りし半源平盛衰記に見えたり

愛知川中ゝ武里半なれども西の方へよりて八幡の河く

沙道法五十町許あり

武佐

八幡

武亀の新舎此地なりて高人多く産土なり故幡地及び布施

粟袋園先祖心苔藤名なり

比年禮社 八幡瀧津鳥ふあり延喜式

神名帳大鳥神社云

一本社中央應神天皇左神功皇后右 田心姫神 湍津姫神 市杵島姫神 此三神を玉依姫尤称に

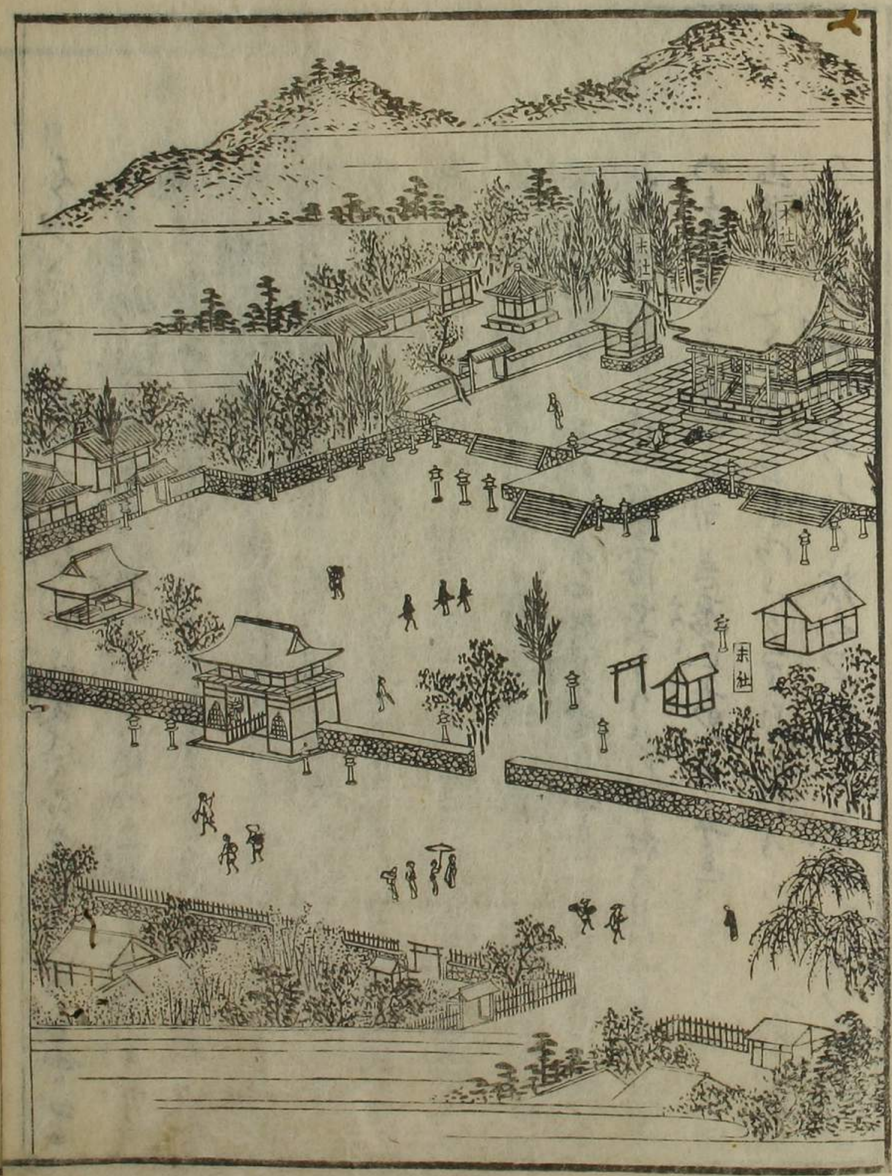
天照太神社幸社の稲荷社幸社の若宮 日吉神社

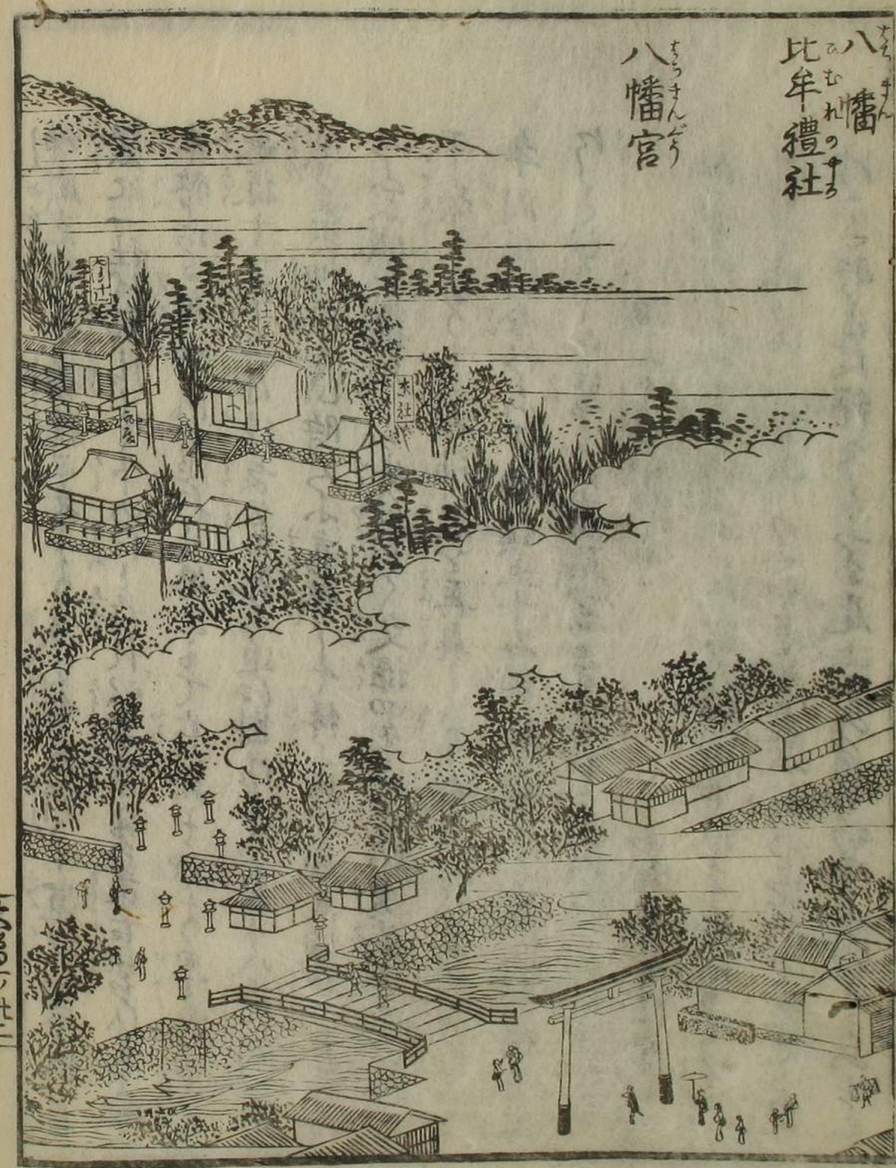
大嶋社二前 日所ふる 神楽殿 社の左の方 拝殿 社の
楼門 傳へ云賀茂の新甲奥 古代の新 ふて 勅者 謂ふべし
島居額 八幡宮と書し持明院大納言 碁 時卿の筆なり
其外末社多し 畧之
夫當社の殖産を原ふに社傳云人皇十三代成務帝高穴穂
宮ふおゐく即位の御時武内大臣ふ命じ此瀛津島ふ於て
大偽を神を祀りむ厥后神の告よりて八幡宮社同殿ふ殖
なを敬天慶年中平将門追討の時六孫王經基公系義ありて
祈願をこめ直ふ賊敵亡びぬ因茲ふ上ふ移し火振八幡宮
称し八月十五日例祭を行ふ抑るに湯成院の御宇天下旱魃の
時祈雨を祈ふ速ふ霊應ありて毎歳三月十五日御幸
垢離の神事ありて天暦の比ふ佐木家ふ國ふ行まるより氏の神
と崇信し神領五百餘石を寄附し生土三十條簡所を附

神威光耀ふて長徳三年ふ放生會祭行ふ寛弘二年五月
禁ふ一社祭勅ふて下の社と称ふ弘安中ふ蒙古襲ひ来ふ時ふ
奉幣ありて忽神風ふ退れて海上ふて亡びぬ之神ふ星霜重り
永禄十一年九月信長公の為ふ迫ふ國作ふ本家十八箇所一度ふ
滅ぶまふ神社も此時大ふ衰弊して絶ふ抑ふ其頃豊臣秀次
此山ふ城を築ふ一ふ先祖ふ文禄四年ふ亡び慶長五年ふ如く
平天下とあるふまふ神殿を再興し奇觀ふ久ふ其後寛永廿一
年関東の命ふ因て神領五十石神職の除地を賜ふ神德ふ歳
ふくむふ霊驗ふ高ふ世ふ覚ふる

八幡山十景和歌序　小村季吟法印

卯月の十日あり此山の八幡宮乃神ワざにまで作りて世く
けてふゆく里ふハりてやあ名ふ神の上新を見ふ
はるさ形まふ錦奇ふふる尾上ふのぶりの美びふめ出


末社
末社
末社


八幡宮
八幡比年禮社
末社
末社

たるく悦るが光いつくしみけしよりは妻山もさゞなみあしべのちとせの宮居
ちは名あるは寺夕日の影ふかき古花の名妙にて景の色なる
鴫はとりのあさひ書所かきのよりきに今ひとつたちぬと云
みも数をひて蓋乃中の景ふむかきれて名の面をことき花田
なるいづれの家にも漆出せれと海中にも帝人のゆかひ海士の清き
するなとしもくられ家悦すべきひはくすべ紀ふあるれ律の所計
あまいしていひなしくみしたさしも人の歌ふ観音寺衣笠山とも
いへり三十三所の一としき中殿人をわかてれてよりよ悟の正ろへし
安土の山すれそと桃山なる惣見寺ここへ故信長の城くて遠景
山下漕き悦り清せなる人家ありなれど秋の月の夜色の雪
のきれるまで見せ南行き唐崎にわり首里へ中ゆけにて三上の
山背びてく本の宮に流くなりねと鏡の山をもえ入れ名庫去
乃八の美景によるの山く抜え人へて千の景あまりをとりてかたば

見入るさんとぞいへり其衣笠も都の小塩よりの紀豊浦も榎乃
葉井の東にあるなるよしきゝけれど此國の志賀の山にあらぬ江上
のくみ山だくりて飛しはれたる紀斉秋なるすべていかくつつやまもとに寄
みはよみいでたるんとなれ飛びれどもさもあくものにてむ
などふなくもみせられずなるすべて

和りけれ十なるあやわ此山の八幡の社のはじに結びて
世をさけて住身は里にあそび山の景に我の志を抜きてみる　李吟

十景のうち八幡晩鐘
相ふ寄るはまけのひかりにそ神まつるきそるめのその丈　仝

長命寺
長命寺山中にありの上にあり八幡より五十町許
西国巡礼三十一番の札所也
本尊聖観音　聖徳太子の御作

水茎岡
八幡の南の岡山をいへり契沖の吐懐篇すゞ続前の國なりとや
古今大哥所
水茎の岡の屋形に妹とあれと寝ての朝けの霜のふりはも
新古今
水茎の岡の葛葉も色付て今朝うらがなし秋のはつ風　顕昭法師

後撰拾

水茎の岳に濃茅の葦葉乃揺れまを秋寝ぬ夕ぬ　前徳院

新後撰

みちの岳乃まき蒔とあぬれ住む里の志ろ人と杜風と侯　定家

玉葉

つくねの志く形るよりみちきの岳乃蔦葉と面対ふ乃わ　人丸

同

いつ和くまにくふ志ろ和水茎乃岳也の雪ゆ和をほく焼　西家

後撰拾

津逢する紀人よ見せもやみ乃茎に志ろ乃萱生に礼乳母と礼を　基左大臣

新千載

代くの形紙ゆ礼を照らせ水茎の岳に濃茅の杜乃秋の月　俊三位　好忠

同

水茎の岳面に礼像の一物紙このよに波に云の葉ゆ也む　義孝信長

同

みちのくろ乃葉移のうの秋志をこ秋也むすいりと移ゆ秋を　六条内大臣

新後拾

水茎の岳べの小田乃ゆづちゆ寒ゆ紀ゆて早苗ゆ居ゆう　平常孝

同

幾くひを書こ秋中ゆ水ちに礼のくろ礼萱ゆ系ゆひく斗に　俊一和尚

新後拾

みち茎の岳也も志ろくやうこ尾乃寄引をきていつる狩人　拾中納言雅縁

嘉山五七百番

移くゆ志人や形ろん水茎の岳に礼やうの杜礼よの月　西定

同

水茎のくろ乃秋ろく杜也てうれ秋に礼のこ尾をのゆくせ　伊製

木曽名所